桑下城跡 2008

現地説明会資料

平成 21 年　1 月 24 日（土）

主　　催　（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
http://www.maibun.com
調査支援　株式会社　シン技術コンサル
http://www.shin-eng.co.jp

桑下城跡 主要遺構平面図（2007,2008）

「菊花双鶴鏡」（白銅鏡）
直径 11.3cm, 身内径 11.1cm, 重量 386.8g。紐を通して使用していたのか、鈕の孔に絹のような繊維が残る。

＜調査の経緯・経過＞

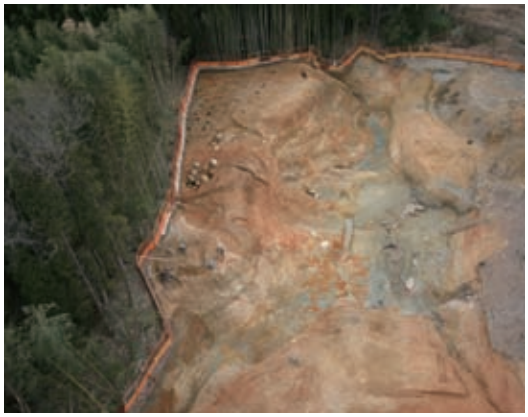
この発掘調査は、国道 363 号の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部より県教育委員会を通じて委託を受け行っています。平成 17 年度は 1,000 ㎡、平成 19 年度は 4,000 ㎡の面積について終了し、第 3 次となる今年度は 8 月～平成 21 年 3 月までの予定で 3,300 ㎡について調査を行っています。

＜桑下城跡の立地と歴史＞

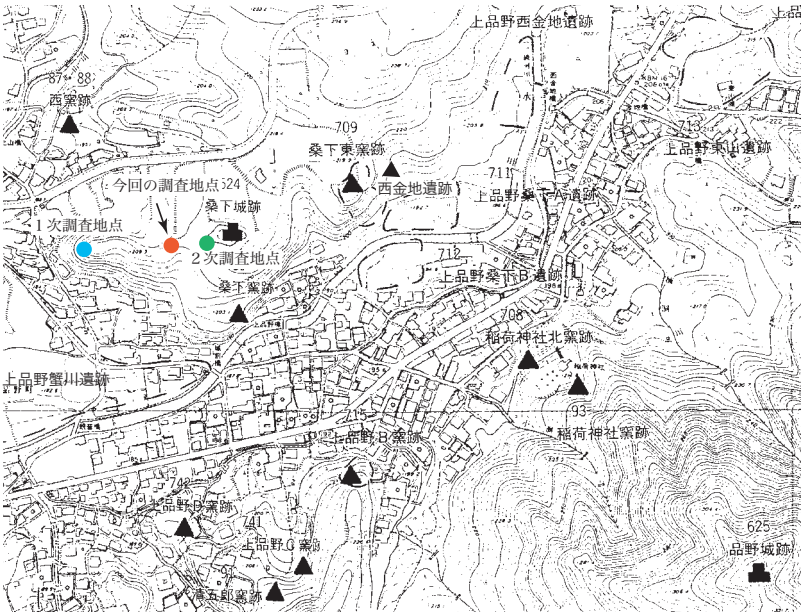
桑下城跡は、瀬戸市の東部にあたる品野盆地の北東部、水野川と蟹川に挟まれた標高約 200m の丘陵上に立地します。周辺の遺跡についてみると、西側の低地部には「文室門」墨書の灰釉陶器が見つかった平安時代の集落、上品野蟹川遺跡（縄文～古代）や、東側の谷をはさんだ丘陵上には陶器を焼いた窯跡（「大窯」）と作業場跡が見つかった桑下東窯跡（戦国）、さらに東側には上品野西金地遺跡（縄文～江戸）などがあります。また、桑下城跡との関係が注目される品野城は、水野川をはさんだ丘陵、標高 330m の尾根線上にあります。

ここ品野は、美濃・三河国との国境に近く、また信濃国へ続く中馬街道が通る交通の要衝であり、織田と松平（松平衰退後は今川）の覇権争いの最前線となりました。江戸時代の地誌類によれば、15 世紀後半頃の桑下城は、品野城主松平内膳（信定）の家老である長江（永井）民部の居城とされています。蓬左文庫には、正保から承応年間（17 世紀半ば）にかけて描かれた品野城、桑下城の古城絵図が残されており、重要な地域の城であったようです。

昨年度（2007）の調査地点
↑北東から上品野蟹川遺跡方面をのぞむ
本丸と東、北側の堀切 東から↓



桑下城跡周辺の遺跡（縮尺 1:8,000）→
「文室門」墨書須恵器（上品野蟹川遺跡）
↓



＜調査の成果＞

（上から順に）本丸から西側に展開する曲輪群／北西の尾根上を縦断する溝／番小屋跡と思われる竪穴状遺構で左側の傾斜は櫓へ続く／土塁の南側に並ぶ柱穴列 ↓

桑下城跡は、東西約 220m、南北約 100m の規模をもつ「平山城」と考えられています。城跡は東西にのびる尾根の北側に堀や土塁をめぐらし、街道と集落を見下ろす南側に多数の曲輪を配置する構造であることなどがわかっています。

昨年度調査された本丸は、「薬研堀」（断面 V 字状）や「箱堀」の形状をもつ大規模な堀切と土塁に囲まれており、その内部と周辺に、建物跡（掘立柱建物 1 間× 4 間、礎石建物 1 間× 1 間など）、井戸 2 基（素掘、石組）などの施設が見つかりました。

出土した遺物のほとんどは瀬戸窯産の擂鉢、天目茶碗、皿などの陶器や匣鉢、挟み皿などの窯道具類ですが、土師質の鍋や皿のほか中国産青磁碗、白磁皿も含まれています。堀の下層では漆椀、下駄、柄杓、陽物形などの木製品、石臼なども見つかりました。特殊なものとして一字一石経や和鏡（「菊花双鶴鏡」白銅鏡）があります。和鏡は 14 世紀代京都の工房で製作されたと考えられるもので、類似する資料に明徳元（1390）年に調進された熊野速玉大社（和歌山）の古神宝の鏡があります。

今年度は、昨年度調査地点に隣接する本丸の西側の範囲について行っています。

本丸と隣の曲輪との間は深い堀で明確に区分されています（調査中）。丘陵の北東側は一部に土塁が残り、その南側にかけて平坦面（曲輪）を 14 箇所を確認しました。細長い形状の「帯曲輪」は、丘陵部を削り盛土して大規模に造成されています。所々に検出される緩傾斜部分は通路の痕跡と思われます。城の施設としては、最も高い曲輪の北東部に櫓跡と番小屋（仮小屋）、北西部で土塁と建物跡と思われる柱穴列、調査区南西隅で庭園跡と思われる石組や井戸などが見つかりました。

そのほか城以前の古い遺構として、古代の竪穴建物跡 1 棟と、北向き斜面で中世の山茶碗を焼成した窖窯 1 基（調査中）が確認されました。

櫓跡……本丸とは堀切を挟んだ対岸の曲輪北東隅の位置で周

囲より一段高い。北側より続く土塁を切り独立させたか、あるいは盛土で造られている。絵図で「櫓」と記されている部分か。

番小屋……櫓のすぐ西側と土塁の南側の２ヶ所で確認。傾斜地を竪穴状に掘り凹めて、南側に出入口を設けている。床面積は 6.4 ㎡と 7.8 ㎡（約２坪）であり、平面形はそれぞれ方形状、三角形状をなす。柱穴は内部と周縁、特に出入口付近は小穴が列状にみられる。

建物跡……土塁の南側のやや広い曲輪とさらに南側の一段下の曲輪にかけて、堅い基盤層を掘り込む柱穴列がみられる。このような位置では柵列はあまり意味をなさなず、曲輪の段差を利用した「掛けづくり」の建物あるいは覆屋のようなものが想定される。

庭園跡……調査区南西端の最も低い位置の曲輪で検出。壁面から滲み出す水を溜める井戸、導水の溝、池、石組み溝などがみられる。井戸は直径 113cm、深さは約 85cm。やや特殊な構造で、底より 35cm 上の側面に横穴を掘り、井戸中位より池の方向に導水する溝につながっている。水は池へ直接落ちず、池の縁に沿って一旦側方へ流れるような仕組となっている。石組みやその他配石は随所に火を受けた痕跡があり、造り替えや廃絶後の破壊により本来の状態を残す部分は僅かと思われる。

撹乱の壁面で窖窯の一部を確認（焚口付近のようです）／本丸西側の堀切のトレンチ掘削／多数出土する擂鉢には使用により磨り減った部分が判別できる資料もあります。

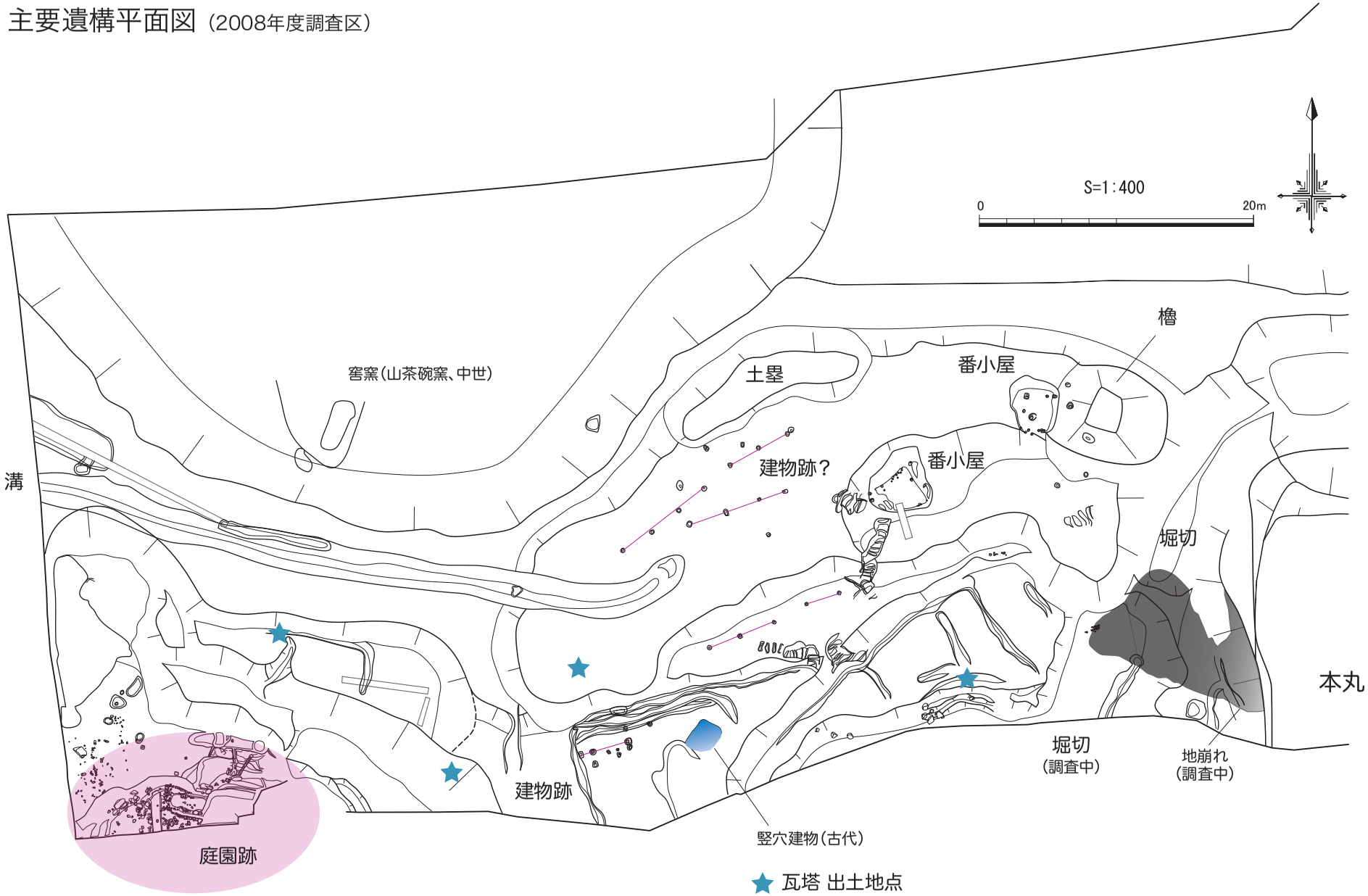
＜主な出土遺物＞

城館が機能した戦国時代の遺物として、瀬戸窯産の擂鉢、天目茶碗、皿のほか鍋類や土師器皿、常滑窯産の壺甕類、石製の硯などがあります。ただし出土点数は極端に少なく、日常的に生活した場所ではなかったようです。

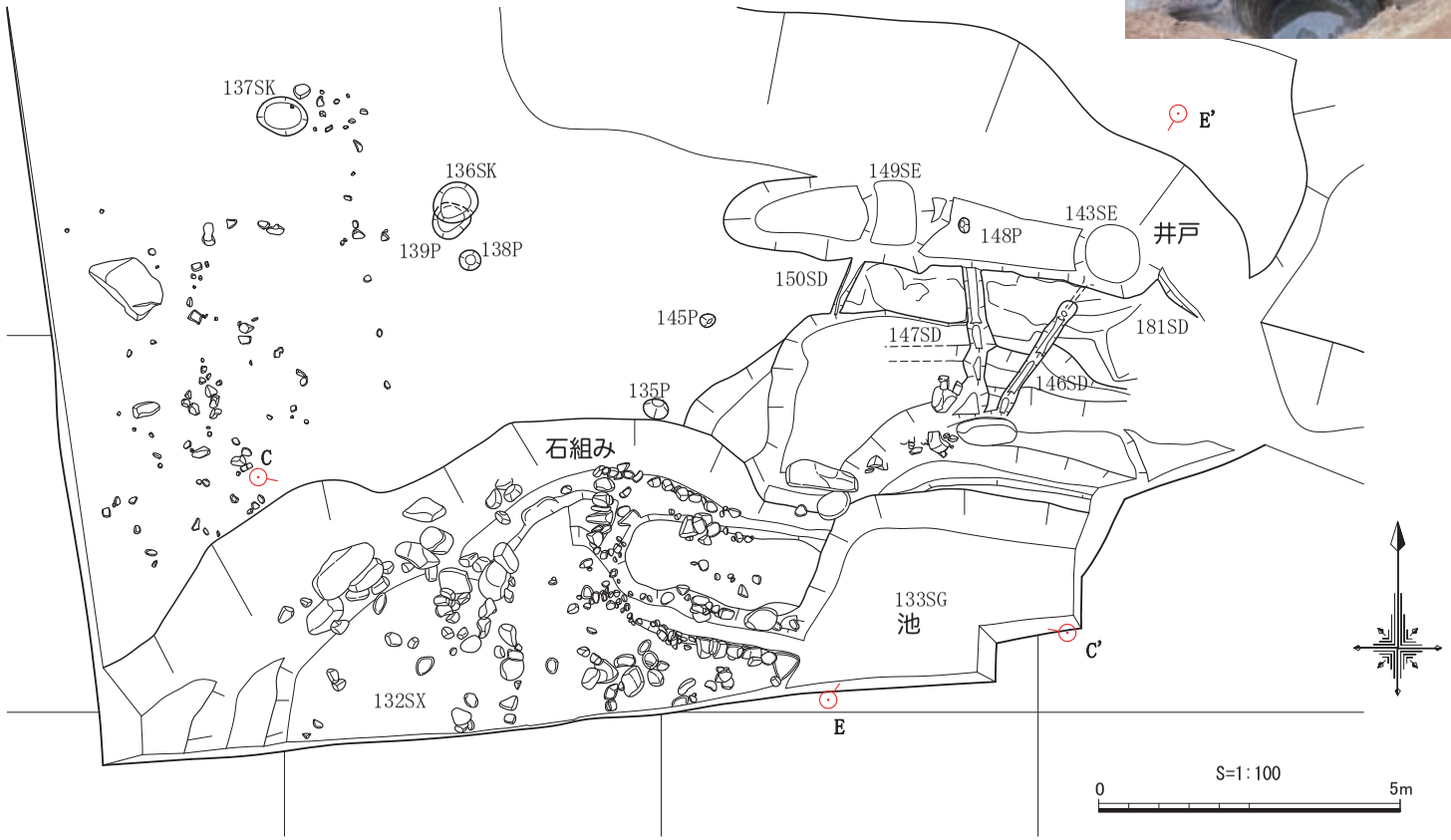
城館となる以前の遺物では、平安時代の須恵器杯蓋、瓦塔（8 点）、鎌倉時代の山茶碗、皿が出土しました。

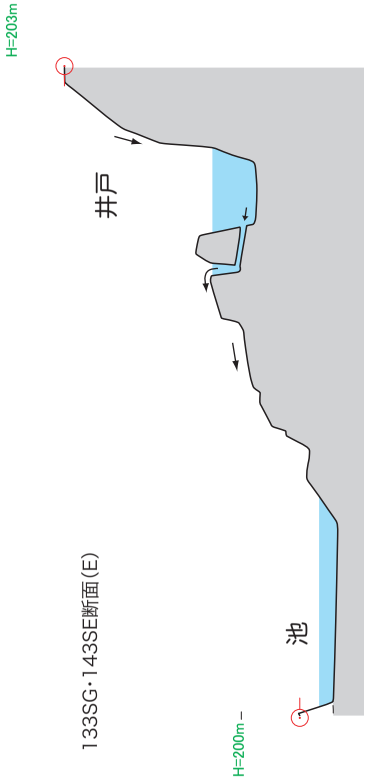
↑ 井戸と導水の溝
池と石組み溝付近 →

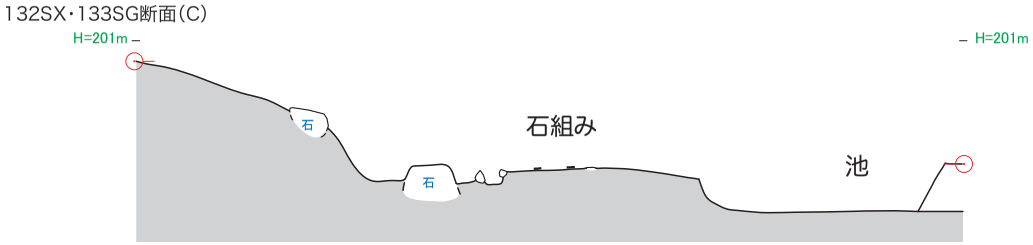
主要遺構平面図（2008年度調査区）



庭園跡　平面・断面図


137SK
136SK
139P
138P
149SE
148P
143SE
井戸
E'
150SD
145P
147SD
181SD
146SD
135P
石組み
C
133SG
池
C'
132SX
E
S=1:100
0
5m


H=203m
井戸
133SG・143SE断面(E)
池
H=200m


132SX・133SG断面(C)
H=201m
H=201m
石
石
石組み
池

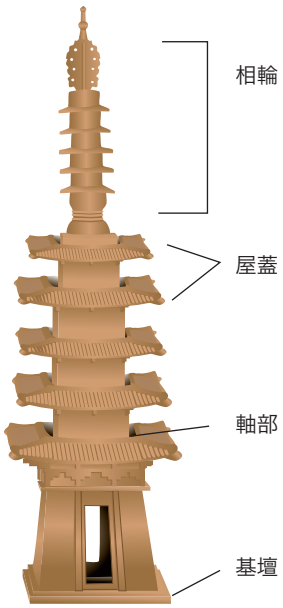
【がとう】

（瓦塔）って何ですか？

奈良時代～平安時代にかけて、右図のような五重塔などを象ったやきものが作られました。近辺では猿投窯（猿投山西南麓古窯跡群）の須恵器窯で多く生産されたことが分かっています。生産地以外では集落内や寺院跡付近で見つかることもあり、塔という形状から、仏教に関連する施設や空間に置かれたのではと考えられています。まだまだ謎の多い資料です。

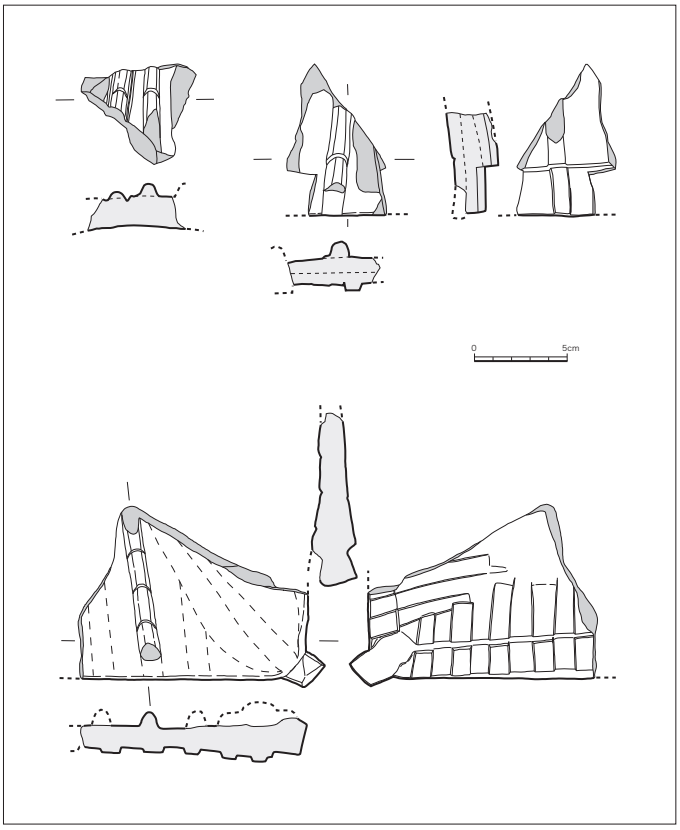
愛知県内ではこれまでに43遺跡（窯跡16地点、集落など27地点）から見つかっています。桑下城跡で出土した8点は、やや軟質のものもありますが、青灰色の須恵質であり、すべて屋蓋部の破片です。瓦塔はそれぞれの部分を別に作って組み合せるもので、これらは同一個体のパーツとも考えられます。ただ、出土地点はバラバラに離れていますけどね。

当時はどこに？どんな風に置かれていたのでしょうか？



瓦塔模式図

桑下城跡出土の瓦塔
上写真は屋蓋部の上側、丸瓦の列が粘土紐で表現されています。／同じく下は屋蓋部の下側、角柱の垂木部分が粘土を切り出して表現されています。



瓦塔片実測図（縮尺 1/4）

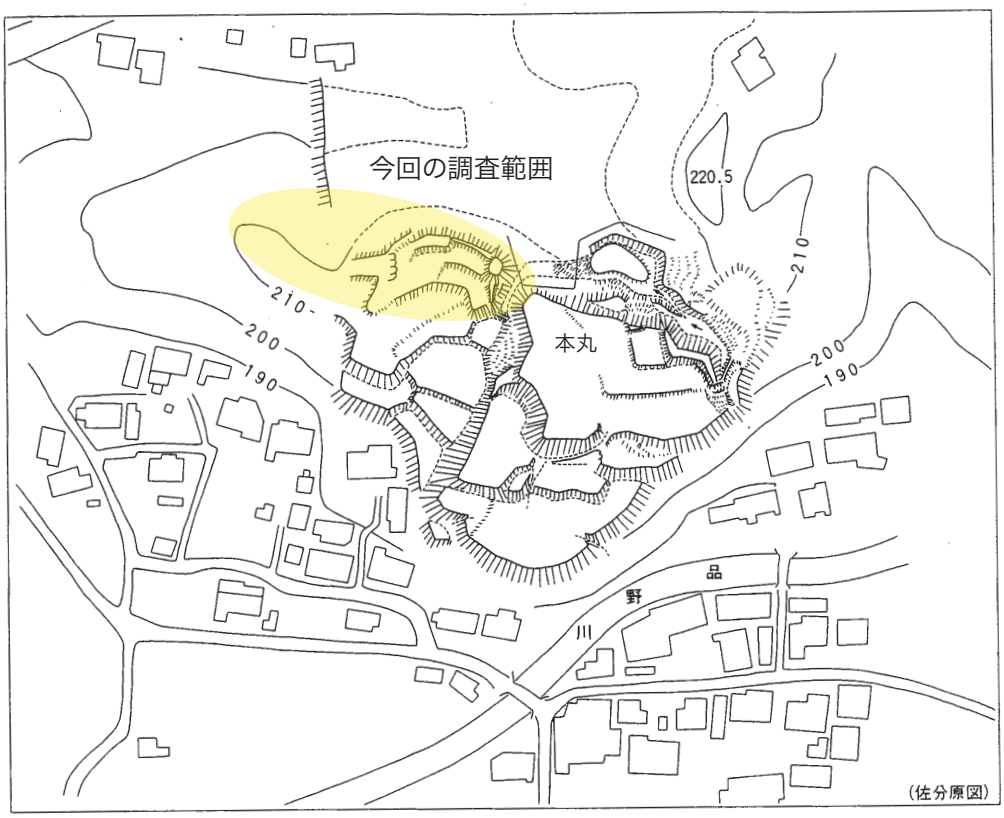
＜まとめ＞

今回の調査では、丘陵を削り、盛土して築かれた多数の帯曲輪と、曲輪からは番小屋跡、庭園跡を確認しました。本丸部分は堀と土塁で厳重に防御を固めており、同じ城館として遺構のあり方が大きく違っています。

おそらく今回調査した部分が丘陵を切り込んで造成された曲輪、防御を基本とする施設を配置した曲輪であり、在地領主が居住した元々の城であったと考えられます。

桑下城跡本丸部分の堅固な防御施設・大規模な土木工事は、織田方との緊張が高まる中、今川氏の関与により行われたと考えられます。今回の調査からは、まず丘陵の先端側に在地領主の城館がつくられ、これを元に拡張・改変を繰返してきた桑下城の成立過程が明らかになってきました。

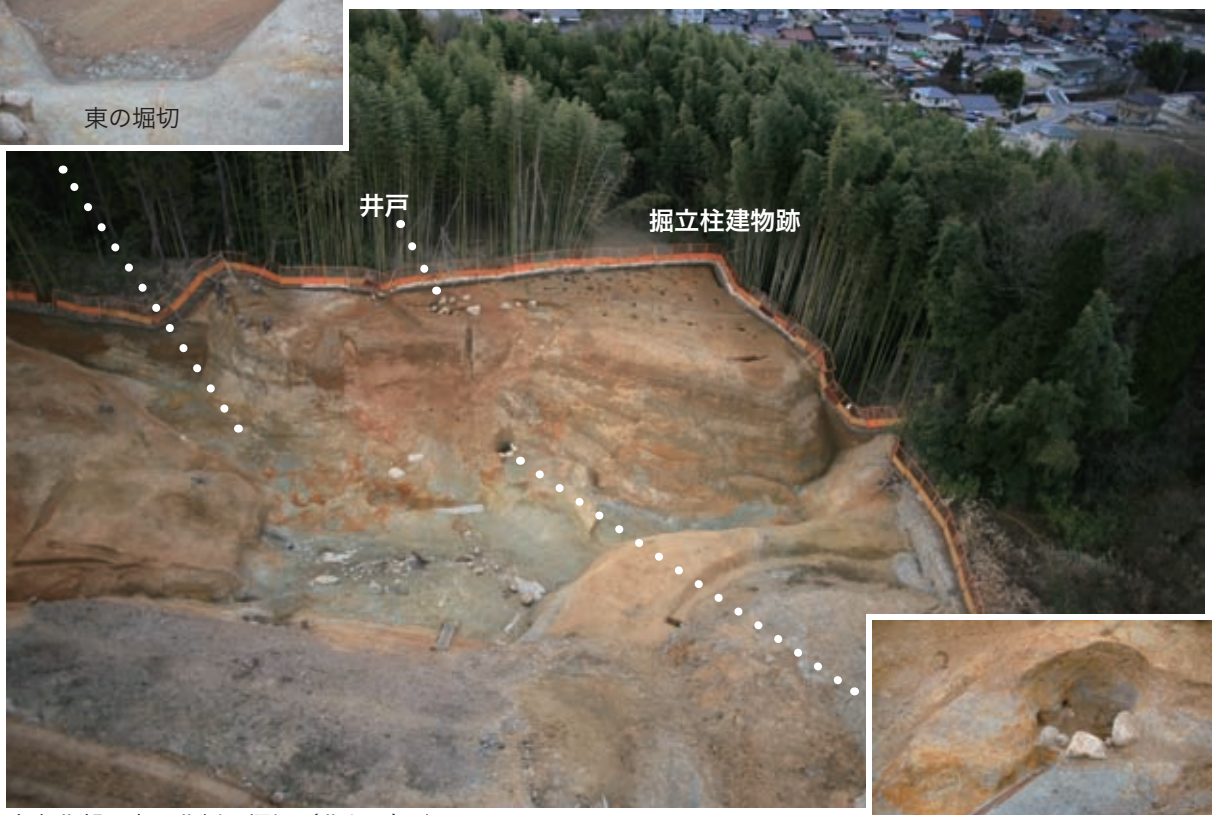
江戸時代地誌類にみられる関連事項	享禄二（1529）年	松平清康（家康の祖父）、品野を奪取し、叔父の松平内膳信定（桜井松平家）に与える
	永禄元（1558）年	松平家次（信定の孫）が守将として品野に派遣され、織田氏との間で戦闘が行われるが、これを退ける
	永禄三（1560）年	桶狭間の戦いで今川義元が敗死する



桑下城縄張図（『愛知県中世城館跡調査報告 I(尾張地区)』より）

2007 年度の調査成果から

↑ 中馬街道が通る谷筋と品野城跡（北西から）



本丸北部、東・北側の堀切（北から）↑